四旬節第4週　木曜日　3月18日

イエスの前にたたずむ

朗読から祈りへ

安心をもたらす約束

神は人に約束した。救い主を送り、人類を救うと。この約束は約束以上のもので「契約」というかたちで与えられた。しっかりとした、ゆるぎない約束。その契約のゆえに人は救いの希望をもつことができる。

モーセがシナイ山で主と出会っているあいだ、山の麓で待っていたイスラエルの民は若い雄牛の鋳像を作りそれを礼拝していた。主はそれを見て怒りに燃え、「彼らを滅ぼし尽くし、モーセを大いなる民とする」という。これは、イスラエルの民全体を救うと約束された主ご自身の契約を変えることになる。モーセは主ご自身がなさった民との契約を思い出させるために主に向かって言う。

「あなたは彼らに自ら誓って、『わたしはあなたたちの子孫を天の星のように増やし、わたしが与えると約束したこの土地をことごとくあなたたちの子孫に授け、永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか。」主はこのモーセの執り成しを聞き入れ、災いをくだすことを思い直された。主は、ご自身の契約を守ることに忠実であった。

神がご自身でなされた契約。それは神の慈しみのこころから出てきた

聖書朗読

今日のポイント

神は、雄牛像を造った民に怒りをあらわにし「彼らを滅ぼし尽くす」と宣告します。モーセは民のために執り成しを行います。すると神は思い直し、民との関わりを続行します。「思い直す」という言葉は「人間を不憫に思い、人間に対する態度を最終目標に合わせて調整する」を意味します。旧約聖書は民に対する神の譲歩の歴史と言えますが、その頂点はイエスの十字架でした。

イエスは人間による証しは受けず、父なる神その方が証しする存在です。「あなたたち」はそれを受け入れることができません。神がイエスに与えた業に、神の働きを見ることができないからです。神の働きを見ることができないなら、「かたくなな民」として、「人間」に留まることになってしまいます。

第一朗読

出エジプト32章7―14節

7 主はモーセに仰せになった。「直ちに下山せよ。あなたがエジプトの国から導き上った民は堕落し、8 早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の鋳像を造り、それにひれ伏し、いけにえを

ものであった。神は人を丸ごと受け止める。人が神に忠実でなくても、神はご自身に忠実である。それがゆえに、人はその神に信頼し、信頼することができる。こうして人は救いと安心を得ることができる。

今もある雄牛の像

イスラエルの民はモーセの下山を待ちきれずに、麓で雄牛の像を作ってそれを礼拝していたが、それは、そのまま偶像崇拝をしていることを表してはいない。「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ」と叫んでいるのだから、かれらは神を礼拝していたと考えていい。しかし、かれらの過ちは、勝手に自分たちで作った神の像に向かって叫んでいたことにある。今も同じようなことを感じるときがある。

長い伝統をもつ教会は、さまざまなかたちで神への礼拝を表してきた。それは唯一の神への礼拝であった。その表現は時代によって変わってきたとはいえ、教会はゆるぎない教義を保ってきた。表現の先には常に慈しみ深い唯一の神が在る。ただ、そこに向かう軸がずれているときがある。

相談の電話があった。弟の葬儀に甥や姪たちが集まった。日ごろは皆教会との関わりがほとんどないので、葬儀ミサの前にゆるしの秘跡を受けることを勧めた。一人は教会で挙式をしていないので聖体拝領をしてはいけない、と釘を刺した。兄弟たちの間でその方だけが聖体拝領をしなかった。ミサの後、その方は自分だけ聖体拝領をしなかったので大恥を受けたと叔母を批難した。教会で結婚式をしていない。そのままの状態でずっと教会に行っていない。そのまま聖体拝領をすることはさ

さげて、『イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ』と叫んでいる。」9 主は更に、モーセに言われた。「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である。10 今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」11 モーセは主なる神をなだめて言った。「主よ、どうして御自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか。あなたが大いなる御力と強い御手をもってエジプトの国から導き出された民ではありませんか。12 どうしてエジプト人に、『あの神は、悪意をもって彼らを山で殺し、地上から滅ぼし尽くすために導き出した』と言わせてよいでしょうか。どうか、燃える怒りをやめ、御自分の民にくだす災いを思い直してください。13 どうか、あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたは彼らに自ら誓って、『わたしはあなたたちの子孫を天の星のように増やし、わたしが与えると約束したこの土地をことごとくあなたたちの子孫に授け、永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか。」14 主は御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された。

福音　ヨハネ5章31―47節

31「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。32 わたしについて証しをなさる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなさる証しは真実であることを、わたしは知っている。33 あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。34 わたしは、人間によ

涜聖の大罪だとわたしは教えられてきた。だから、わたしは注意した。見逃すことはできなかった。そうすればわたしも罪を犯すことになる。わたしは間違っていたのでしょうか、という悩みの相談だった。相談を受けた方も悩む。　慈しみ深い神にどのように向かったらいいのだろうか。「愛」を最優先するために、どのようなかたちをとったらいいのだろうか。けっして簡単な問題ではないと思う。

ただ感じることは、今の教会の中でも、あまりにもかたちに囚われていることが多すぎるということである。わたしたちを真の意味で自由にする神の契約が、掟中心に生きることによってかえって真の自由から遠ざかってしまう。平和に生きることができないでいる。神が怒りの中にあってもご自身が立てた契約に忠実であったことを思うとき、そこに救いがあるように思えるのだが…。

人の証明によるのではなく、聖霊の証明によって

もっとダイレクトにキリストとかかわることはできないのだろうか。人の勧めや人の考えに左右され、それに固執してしまうきらいがある。祈りが足らないから幸せになれない。熱心でないから罰せられる。教会に行ってないからものごとがうまくいかない。このようなことを日常の中でたびたび聞く。イエスは人からの証明を必要としない。人からの誉れも受けない。イエスは言う。「聖書はわたしについて証しするのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしない。」

聖霊が与えられているのだから、もっと聖霊に信頼して聖書に触れ、イエスの前にたたずんでみたい。そこにこそ「命」があるのだから。

（M・M・Y）

る証しは受けない。しかし、あなたたちが救われるために、これらのことを言っておく。35ヨハネは、燃えて輝くともし火であった。あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しもうとした。36しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている。37また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。38また、あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。39あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。40それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしない。

41わたしは、人からの誉れは受けない。42しかし、あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている。43わたしは父の名によって来たのに、あなたたちはわたしを受け入れない。もし、ほかの人が自分の名によって来れば、あなたたちは受け入れる。44互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしないあなたたちには、どうして信じることができようか。45わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ。46あなたたちは、モーセを信じたのであれば、わたしをも信じたはずだ。モーセは、わたしについて書いているからである。47しかし、モーセの書いたことを信じないのであれば、どうしてわたしが語ることを信じることができようか。」